

小学校教員のダンスに対する ジェンダー・イメージ、抵抗感と羞恥心について

酒向 治子 ・ 平田麻里子* ・ 猪崎 弥生**

本研究では、岡山県内の教員歴が比較的少ない小学校教員を対象として、ダンス教育におけるジェンダー・イメージ（男らしさ/女らしさ）、ダンスに対する態度（抵抗感と羞恥心〔恥ずかしさ〕）に関する質問紙調査を行い、実状を把握することを試みた。その結果、①ジェンダー・バイアスについては未だ根強く残っており、特に「創作ダンス」が女性らしいと思われる傾向にあること、②抵抗感や羞恥心については、過半数が抵抗感や羞恥心を抱えていることが明らかとなった。今後さらなる調査研究を進め、長年ダンス教育で指摘されてきた小学校教員のダンス（表現運動）へのバイアスや負の意識のメカニズムを解明する必要性が浮き彫りとなった。

Keywords：ダンス、ジェンダー・イメージ、羞恥心、抵抗感

1. はじめに

中学校1・2年生のダンスの必修化を受けて、効果的なダンスの授業内容や指導法を検討するために、中学生や中学校教員のダンスに対する意識を明らかにすることは重要な課題である。筆者ら研究グループはこうした認識のもと、これまで教員と中学生の両方を対象にダンスに対するジェンダー・イメージや態度（抵抗感や羞恥心）に関する質問紙調査を2011年より継続的に行ってきた¹⁾。その結果、要点として以下が浮き彫りとなった。

① ダンスに対するジェンダー・イメージについて：

「男らしい/女らしい」といった性別による偏見を意味するジェンダー・バイアスについて、中学生はあまり「ダンスは女らしい」という従来型の図式にあてはまらなくなっている。どちらかと問われると「女らしい」に傾きがちではあるものの、「男らしい」というイメージも生じつつあり、「どちらともいえない」という揺らぎの中にあるのが実状と考

えられる。

中学校教員については、ジェンダー・イメージについて男女ともにどちらかといえば「女らしい」と思っているということが推定できた。

② ダンスに対する態度（抵抗感や羞恥心）について：

2012年に行った調査では、抵抗感について教員と中学生双方とも男女を問わずダンスについて「どちらかといえば抵抗感をもっている」という結果を得た（酒向他 2013a）。2013年に女性教員のみに行なった調査結果と総合して考えると、教員はダンスに抵抗感を抱く傾向にあるといえる（酒向他 2014）。羞恥心については同じく女性教員のみに行なった調査結果から、全体に占める度数の割合（%）で見ると、「どちらかといえば羞恥心（恥ずかしさ）を感じる」人の方が多くなっている。ダンスに関する否定的な感情ともいえる「抵抗感」や「羞恥心」は未だ根強いともいえる。

岡山大学大学院教育学研究科 生活・健康スポーツ学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*共立女子大学 101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1

**お茶の水女子大学 112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

Elementary School Teachers' Gender Image, Negative Feelings and Embarrassment toward Dance

Haruko SAKO, Mariko HIRATA*, and Yayoi IZAKI**

Division of Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Kyoritsu Womens University, 2-2-1 Hitotsubashi Chiyoda-ku, Tokyo 101-8437

**Ochanomizu University, 2-1-1 Otsuka Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

ダンスの必修化を受けて、中学校の生徒や教員のダンスに対する意識は変容しつつあり、過渡期であると考え、今後も引き続き調査を行っていく必要があると思われた。

一方で、上記の調査を行っていく中で、中学生のダンスに対するイメージは、小学校の体育における表現の授業より影響を受ける可能性があることが浮上した(酒向他, 2013c)。小学校の体育におけるダンス領域は、運動会で踊りを披露することで授業時間を消化する傾向にあり、授業として表現運動を行うところは未だ少ない。そしてこの背景には、小学校教員の表現運動に対する苦手意識という問題が長年にわたり指摘されている。充実した身体表現教育を行うには、小学校・中学校・高校と12年間を見通す視点が不可欠である。その意味では、小学校の教員のダンスに対する意識や課題の明確化が必須であるといえる。

2. 目的

本研究では、現役小学校教員を対象にダンスに対するジェンダー・イメージ、態度(抵抗感と羞恥心)について質問紙調査を行い、考察を行う。このことを通して、ダンス教材や指導法開発の土台となる基礎的資料を得る事を目的とする。

3. 方法

実施日 2016年7月25日

対象者 岡山県の小学校体育教員を対象としたダ

ンス指導者講習会に参加した教員のうち、回答が得られた20代から30代の計55名(男性18名, 女性37名)。被験者の基礎的情報(教員歴, ダンス指導経験歴, 教員養成機関におけるダンス実技履修経験)の内訳を表1に示す。

調査項目 1. 年齢, 2. 性別, 3. 教員歴, 4. ダンス指導経験年数, 5. 教員養成機関において、ダンス実技を履修した経験の有無, 6. ダンス(一般)に対するイメージ, 7-1. 創作ダンスに対するイメージ, 7-2. フォークダンスに対するイメージ, 7-3. リズムダンスに対するイメージ, 8. ダンス指導をすることへの抵抗感, 9. ダンスをすることへの羞恥心, 10. ダンスを指導する上で気づいた点(指導上の困難や問題等)に関する自由記述。

手続き 講習会後に質問紙を被験者に配布し、研究の趣旨を説明した上で回答を求めた。調査票への記名は求めている。また、調査票の冒頭、回答結果は研究に利用するのみで、他の目的に使用しないこと、回答結果はすべて統計的に処理しプライバシーが漏れることはないことを明記した。

4. 結果と考察

4-1. ダンスに対するジェンダー・イメージ

(1) 回答者(度数)の割合

「ダンス(一般)」に対するジェンダー・イメージ、およびダンス三領域に対するジェンダー・イメージ

表1 被験者の内訳

	教員歴		ダンス指導経験歴		教員養成機関におけるダンス実技履修経験の有無	
	1~9年	10~19年	1~9年	10~19年	ある	ない
女性 n=37	33(89.2%)	4(10.8%)	35(94.6%)	2(5.4%)	20(54.1%)	17(45.9%)
男性 n=18	17(94.4%)	1(5.6%)	18(100%)	0(0%)	12(66.7%)	6(33.3%)
全体 n=55	50(90.9%)	5(9.1%)	53(96.4%)	2(3.6%)	32(58.2%)	23(41.8%)

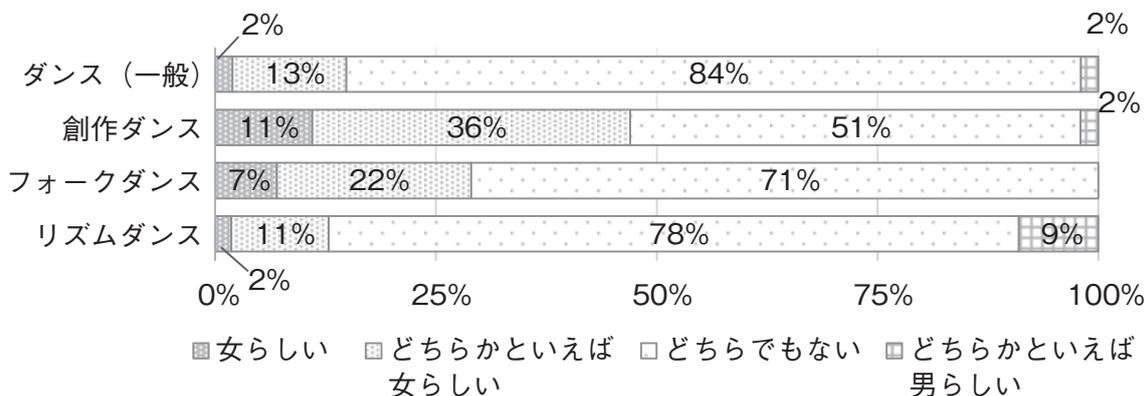


図1 ダンスに対するイメージ

の各回答項目の度数を算出し、各々が全体に占める割合をグラフ化したところ、次のような結果となった(図1)。「どちらでもない」という回答者が「ダンス(一般)」の84%を最大として、「創作ダンス」(51%)「フォークダンス」(71%),「リズムダンス」78%と、いずれも「どちらでもない」が過半数を超えていることがわかる。また、「男らしい」がそろって0%であった。

一方で領域別に詳しく見ると、三領域とも「どちらかといえば女らしい」と「女らしい」を合わせた割合に比べて、「どちらかといえば男らしい」「男らしい」を合わせた割合は低い。つまり、「女らしい」というジェンダー・バイアスが残っていることを示唆していると考えられる。中でも創作ダンスは「女らしい」「どちらかといえば女らしい」を合わせると47%と半数に近い値を示しており、「どちらかといえば男らしい」2%の値と比べると、「女らしい」イメージが未だ根強いことが伺える。一方で、「男らしい」はどの領域でも0%であったものの、「どちらかといえば男らしい」の値はリズムダンスで9%と三領域の中では最も高い数値が出ている。

(2) ダンスのイメージと性別

ダンスのイメージの各項目を得点化し(「女らしい」1点,「どちらかといえば女らしい」2点,「どちらでもない」3点,「どちらかといえば男らしい」4点,「男らしい」5点),性別で平均値を算出した

ところ,以下のような結果となった(表2)。

平均値をみると,女性の「創作ダンスのイメージ」が2.35とやや女性よりであるが,それ以外は全て「どちらでもない」範囲に収まっている。さらに「ダンス(一般)」「創作ダンス」「フォークダンス」「リズムダンス」各イメージの男女差についてt検定を行ったところ,「フォークダンス」のみ有意差が認められたものの,その差は「どちらでもない」の範囲内におけるものであった。

(3) ダンスのイメージと教員養成機関におけるダンス実技履修経験の有無

上記同様にダンスのイメージの各項目を得点化し,教員養成機関におけるダンス実技履修経験の有無別に平均値を算出しt検定を行ったところ,履修経験の有無で有意な差は認められなかった。

4-2. ダンスを指導することへの抵抗感

(1) 回答者(度数)の割合

「ダンスを指導することへの抵抗感」についての各回答項目の度数を算出し,図2に各々が全体に占める割合をグラフ化したところ,「どちらかといえば抵抗がある」回答者が42%であり,「抵抗がある」回答者13%を合わせると全体のおよそ半数以上にあたる55%が抵抗感を抱えていることがわかった。一方で「どちらかといえば抵抗はない」と回答した29%に「抵抗はない」と回答した9%を加えると

表2 ダンスに対するイメージ

	女性(n=37)		男性(n=18)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
ダンス(一般)	2.84	.50	2.89	.32	.39
創作ダンス	2.35	.79	2.61	.50	1.48
フォークダンス	2.51	.69	2.89	.32	2.74 **
リズムダンス	2.95	.62	2.94	.24	.01

**p<.01

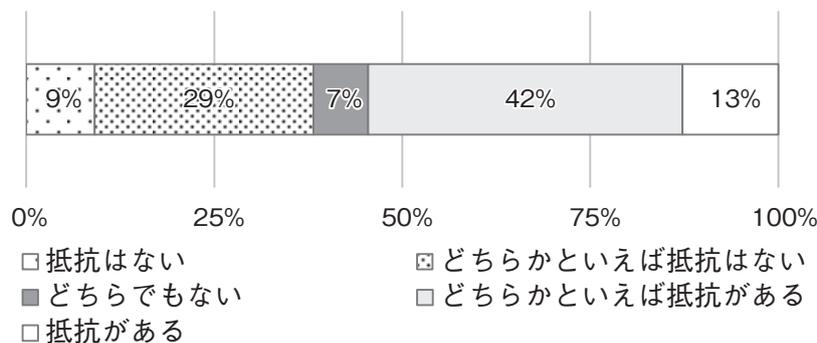


図2 ダンスに対する抵抗感

38%であり、全体のおよそ半数以下であることがわかった。

(2) 性別と「抵抗感」

「ダンスを指導することへの抵抗感」の各項目を得点化し（ダンスを指導することについて「抵抗はない」1点, 「どちらかといえば抵抗はない」2点, 「どちらでもない」3点, 「どちらかといえば抵抗がある」4点, 「抵抗がある」5点）, 男女差についてt検定を行ったところ、有意な差が認められた（女性2.95<男性3.72 t(44.60)=2.49, p<.05）。

(3) 「抵抗感」と教員養成機関におけるダンス実技履修経験の有無

上記と同様「ダンスを指導することへの抵抗感」の各項目を得点化し、教員養成機関におけるダンス実技履修経験の有無とダンスを指導することの抵抗感の有無についてt検定を行ったところ、有意な差は認められなかった（経験あり3.19 経験なし3.22 t(53)=.09, n.s.）。

4-3. ダンスをすることへの羞恥心

(1) 回答者（度数）の割合

各回答項目の度数を算出し、図3に各々が全体に占める割合をグラフ化したところ、「どちらかといえば羞恥心（恥ずかしさ）を感じる」回答者が46%であり、「羞恥心（恥ずかしさ）を感じる」回答者7%を合わせると全体のおよそ半数以上にあたる53%はダンスに対して羞恥心を感じていることがわかった。一方で「どちらかといえば羞恥心（恥ずかしさ）を感じない」回答者18%に「羞恥心（恥ずかしさ）を感じない」回答者11%を加えると29%と全体のおよそ半数以下であることがわかった。

(2) 「羞恥心」と性別

「ダンスに対する羞恥心（恥ずかしさ）」の各項目を得点化し（「羞恥心（恥ずかしさ）を感じない」1点, 「どちらかといえば羞恥心（恥ずかしさ）を感じない」2点, 「どちらでもない」3点, 「どちらかといえば羞恥心（恥ずかしさ）を感じる」4点, 「羞恥心（恥ずかしさ）を感じる」5点）, 男女差についてt検定を行ったところ、有意な差は認められなかった（女性3.16 男性3.28 t(53)=.344, n.s.）。

(3) 「羞恥心」と教員養成機関におけるダンス実技履修経験の有無

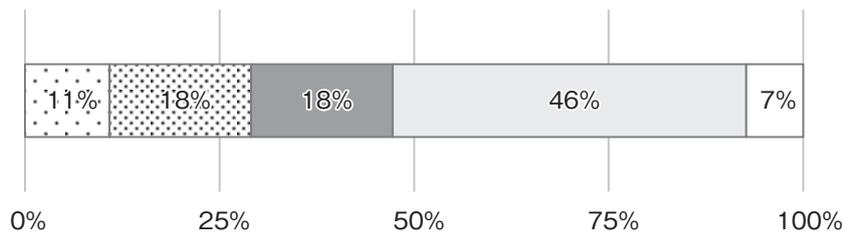
上記同様に「ダンスに対する羞恥心（恥ずかしさ）」の各項目を得点化し、教員養成機関におけるダンス実技履修経験の有無についてt検定を行ったところ、有意な差は認められなかった（経験あり3.25 経験なし3.13 t(53)=.37, n.s.）。

5. 討議

本調査の結果から、以下のことが明らかとなった。

(1) 性別と「ダンスのジェンダー・イメージ」

ダンスのジェンダー・イメージについて、「どちらでもない」という回答者が「ダンス（一般）」(84%), またダンスの3領域「創作ダンス」(51%)「フォークダンス」(71%)「リズムダンス」(78%) 全てにおいてが過半数を超えていた。またダンスの「女らしい」から「男らしい」まで各項目を得点化し男女差についてt検定を行なったところ、「フォークダンス」に有意差が見られたものの、「どちらでもない」の範囲におさまるものであった。これらの結果からみると、今回教員歴が比較的少ない（1～9年が全体の90%以上）小学校教員にとって、「ダンス」のジェ



- 羞恥心（恥ずかしさ）を感じない
- ▨ どちらかといえば羞恥心（恥ずかしさ）を感じない
- どちらでもない
- どちらかといえば羞恥心（恥ずかしさ）を感じる
- 羞恥心（恥ずかしさ）を感じる

図3 ダンスに対する羞恥心

ンダー・イメージは「男らしい」や「女らしい」に偏りがあまりないともいえる。

一方で、完全にジェンダー・バイアスがないとも言いきれない。その理由として、第一に「ダンス（一般）」、またダンスの3領域「創作ダンス」「フォークダンス」「リズムダンス」全てにおいて「男らしい」という回答者が0%であったこと、第二に「創作ダンス」について「どちらでもない」が51%である一方で、「女らしい」(11%)「どちらかといえば女らしい」(36%)を合わせると、過半数に迫る47%もが「女らしい」というイメージを抱いていること、第三に同じく「創作ダンス」についての平均値の男女差をみたところ、有意差は認められなかったものの女性の「創作ダンス」のイメージがやや女性よりであったこと等が挙げられる（女性：2.35，男性：2.61）。これらの結果を総合すると、教員歴が比較的少ない小学校教員にとってダンスについてのジェンダー・イメージは中立の傾向にあるものの、女性らしいというジェンダー・バイアスは未だ根強く残っており、特に「創作ダンス」が女性らしいと思われる傾向にあるといえる。

(2) 性別とダンスへの態度（「ダンスを指導することへの抵抗感」「ダンスをすることへの羞恥心」）

ダンスへの態度（「ダンスを指導することへの抵抗感」と「ダンスをすることへの羞恥心」）について、ともに過半数が抵抗感・羞恥心を抱いているという結果であった。それらについてさらに（「抵抗はない」から「抵抗がある」、 「羞恥心を感じない」から「羞恥心を感じる」まで）を得点化し、男女差についてt検定を行なったところ、抵抗感に関しては有意差が認められ男性の方が女性より抵抗感を抱いていることが示唆された。一方で、羞恥心に関しては男女で有意な差は認められなかった。これらの結果を総合すると、教員歴が比較的少ない小学校教員が「ダンス（表現運動）」に対する指導への抵抗感や羞恥心など否定的な感情を抱く傾向にあるといえることができる。小学校教員の「表現運動」に対する苦手意識や抵抗感は数十年も前から指摘されてきた問題である（森 1981; 安藤・岡田 2003）。今回の調査結果は同様の傾向を示しており、是正されていないどころか、むしろ「表現運動に対する苦手意識から授業を避ける→授業を受けていない児童が大人になり、ダンス（表現運動）をまた避けるようになる」という負のループを形成しているようにすら感じられる。

(3) 履修経験と「ダンスのジェンダー・イメージ」および「ダンスへの態度（「ダンスを指導することへの抵抗感」「ダンスをすることへの羞恥心」）

教員養成機関におけるダンス実技履修経験の有無とダンスへの態度（「ダンスを指導することへの抵抗感」と「ダンスをすることへの羞恥心」）についてt検定を行ったところ、有意な差は認められなかった。これはすなわち、教員養成機関におけるダンス実技の履修経験が良い意味で小学校教員のダンスへの態度に影響を及ぼしていないことを示唆している。

6. 今後の課題

本研究の結果と限界を踏まえ、今後の課題として以下が浮かび上がった。

(1) 量的調査の継続の必要性

今回は教員歴が比較的少ない小学校教員を対象に調査を行ったが、「小学校教員」という大枠でダンスのジェンダー・イメージやダンスへの態度（抵抗感や羞恥心）の実状を把握しようとするならば、教員歴が長い教員を対象にした、より大規模な調査を行うことが必須であろう。

さらに調査手法として、筆者ら研究グループはこれまで質問方法として評定尺度法を用いてきたが、3件法、4件法など実態を把握する上でどのような段階が適切であるについて未だ試行錯誤を重ねている。奇数段階であると回答が中心に偏る傾向があるものの、「どちらでもない」を省き4件法にした時は、わざわざ欄外に「どちらでもない」と書いた回答者もいるなど、強制的にどちらかに振り分けしたところで、それが実態を反映しているのかについては疑問が残るところである。今後もどのような方法がより適切か見極めるべく、これまで行ってこなかった7件法も視野に入れながら、研究方法そのものも模索し調査を継続していきたいと考えている。

(2) 実態を生み出すメカニズムの解明の必要性

教員のダンスのイメージやダンスへの態度を形成するものとして、社会的なイメージ（特にダンスがメディアでどのように扱われるか）、そして過去の学校教育におけるダンス経験や、教員養成課程での学習の影響など複数の要因が考えられる。特に否定的な傾向を見せるダンスへの態度（抵抗感や羞恥心）が何によってもたらされているのか、その悪循環を断ち切るために、教員のダンス観を生成するメカニズムを徹底的に明らかにする必要があるだろう。

上記のメカニズムの解明にあたって、教員になる前段階として重要な学習期に位置づけられる、「教員養成機関におけるダンス学習内容の影響」は特に着目すべき点の一つである²⁾。今回大づかみに「教員養成機関において、ダンス実技を履修した経験の有無」としてたずねたものの、その内容まで掘り下げて調査を行っていない。教員養成課程におけるどのような「表現運動」や「ダンス」授業の在り方が望ましいのか、その学習内容や指導法について詳細に研究していくことが必要だと思われる。

〔付記〕

本研究は、科研費（課題番号：16K02037）の助成を受けたものである。また、本調査に際し、快くご協力を賜りました岡山県小学校体育実技研修会（表現リズム遊び・表現運動）に参加されました諸先生方のご厚意に心より感謝申し上げます。

注

- 1) これまで、論文では次のような研究成果を発表している（猪崎他 2013：酒向他 2013a：酒向他 2013c：酒向他2014：猪崎弥生・米谷淳・酒向治子編著2015）。
- 2) 小学校教員が「表現運動」を指導する際の困難について、寺山（2007）は質問紙法によってその困難を「授業中に感じていること」と「授業以外の時に感じていること」という大きな二つの分類枠で要素を列挙し、「表現運動」の学習内容の不明瞭さから生じる指導への消極性が大きな課題であると指摘している。今回の調査の自由既述においても、「恥ずかしいからというより、よくわからない、どうすればいいか？どうことがあって気がすすみませんでした」というような、表現運動とは何かという根底的な部分の経験・理解が乏しいことが苦手意識に繋がっていることを伺わせる既述が見られた。「表現運動」について何を（学習内容）をいかに（指導方法）教えるかということについては、まさに教員養成課程で学ぶべきことであり、教員養成課程における「ダンス（表現運動）」の授業内容の充実が早急に求められる。

参考文献

- 安藤幸・岡田晶子（2003）徳島県における小学校舞踊教育の現状と問題点—1991年と2001年の表現運動指導の比較を通して—。鳴門教育大学実技教育研究 13:53-65.
- 猪崎弥生・永田麻里子・酒向治子（2012）大学生はダンスにおける「男らしさ」「女らしさ」をどのように捉えているか—質問紙調査に基づく検討—。スポーツとジェンダー研究 10:16-22.
- 猪崎弥生・酒向治子・永田麻里子・永田麻里子・田中俊之・米谷淳（2013）中学校のダンス・イメージ、ダンスに対する態度、ダンス授業の評価：質問紙調査を基に。お茶の水女子大学人文科学研究9：15-24.
- 猪崎弥生・酒向治子・米谷淳（2015）ダンスとジェンダー—多様性ある身体性—。一二三書房
- 酒向治子・永田麻里子・出原智波・角南順子・猪崎弥生（2013a）教員と中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス。岡山大学大学院教育学研究科研究集録 152:45-49.
- 酒向治子・永田麻里子・出原智波・猪崎弥生（2013b）中学生のダンスに対するイメージ—男女差の検討—。岡山大学大学院教育学研究科研究集録 153:97-101.
- 酒向治子・永田麻里子・出原智波・山口順子・猪崎弥生（2013c）中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス。岡山大学大学院教育学研究科研究集録 154:73-77.
- 酒向治子・永田麻里子・猪崎弥生（2014）中学校女性体育教員のダンスに対する抵抗感と羞恥心について。岡山大学大学院教育学研究科研究集録 155:109-113.
- 寺山由美（2007）「表現運動」を指導する際の困難さについて—千葉県小学校教員の調査から—。千葉大学教育学部研究紀要. 55：179-185.
- 森清・阿部正臣・梶原洋子・メ木一郎（1981）小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識（第5報）。—表現運動の指導の実態とその意識を中心として—。文教大学教育学部紀要 15：35-48.